

社会の変化に応じ、学校の役割、求められる学力の見直しを

新教育課程の下で今後5～10年を見据えて教育活動を進める際に、意識すべき重要な視点はどのようなものか。

義務教育における現在の課題や、今後の展望について、全国連合小学校校長の向山行雄会長と、全日本中学校校長会の新藤久典会長にうかがった。

社会の変化を踏まえて 公立小学校の役割を見直すべき時期

——今後5～10年の中・長期的な視点で小学校教育を考える時に、「これだけは外せない」という視点を話していただきたいと思います。まず、これからの義務教育はどのような状況に置かれるのでしょうか。今と同じ点、異なる点、それぞれをお聞かせください。

向山 明治5年の学制発布以来、公立小学校は町や村のシンボルとして住民の拠り所となってきました。これからも、その役割は担い続けていく必要があるでしょう。一方で、今後は社会全体がますます速いスピードで変化し、それに伴い子どもと保護者の実態や

ニーズも変化していきます(図1)。その状況に公立学校がどのように対応するのか、どのような役割を担っていくのかという視点が重要だと思えます。

例えば、今の子どもは、生まれた時からインターネットに囲まれています。直接体験が減り、間接体験が肥大化している子どもをどのように指導するかは、喫緊の課題であり、今後も対峙し続ける必要がある課題でしょう。また、保護者は、いわゆる団塊ジュニア世代が増えていきます。この世代の保護者の価値観について、我々もっと理解を深めないといけません。保護者の後ろにいる団塊世代の祖父母の、学校に対するかわり方も注視する必要があります。

全国連合小学校校長会会長
東京都中央区立泰明小学校校長

向山行雄

むこうやま ゆきお◎教職歴37年。東京都公立小学校教諭、東京都文京区教育委員会指導主事、東京都教育庁指導部指導企画課指導主事、東京都品川区教育委員会指導課長などを経て現職。モットーは「志を高く掲げて、力強く前進しよう」



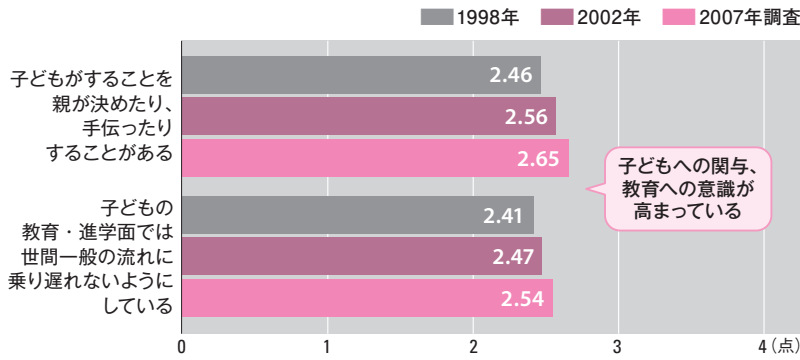
全日本中学校校長会会長
東京都新宿区立西戸山中学校校長

新藤久典

しんどう ひさのり◎教職歴35年。東京都公立中学校教諭、東京都東村山市教育委員会指導室長、東京都教育委員会管理主事などを経て現職。モットーは「Never say "can't".」口を信じて、まず行動する人になろう」

現在と未来をつなぐ小学校教育

図1 保護者の意識の変化(小学3～6年生)



注)数値は「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として無回答・不明を除いて算出した平均値
 出典/Benesse教育研究開発センター「第3回子育て生活基本調査」調査時期は2007年9月、調査対象は首都圏(東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県)の小学1年生から中学3年生の子どもをもつ保護者7,282人(うち小学3～6年生の保護者は2,188人)

こうした変化を捉え、各校が公立小学校としての役割を改めて考え、どのように子どもや保護者と向き合っていくべきかを見つめ直す時期に来ているのではないのでしょうか。

新藤 私も、小・中学校共に、社会の変化に伴って変わっていく必要があると強く感じています。「義務教育だからなくなることはない」と、あぐらをかいていると進化できません。子どもが「この学校で学びたい」と思うような学校を常に目指すべきです。学校の役

割を見直す上で、教師にも主体的な姿勢が求められるのではないのでしょうか。

向山 そうですね。この数十年を見ると、メディアの発達や社会の価値観の変化によって「学校バッシング」が続き、ある意味、学校は守りに入らざるを得ない状況でした。しかし、この2、3年で、小・中学校の教育活動が好意的に受け止められ、評価されるようになってきたと感じています。潮流が変わった今こそ、学校は攻めの姿勢に転じるチャンスだと、私は思います。

新藤 同感です。以前に比べて、「自分たちでやってみよう」と考える校長先生が増えてきたと思います。守りの経営で他校と同じことをするのはなく、自校の子どもたちを見て、それに応じた手立てを考える大切さが広まってきたことは、攻めの姿勢の表れだと感じています。

向山 その姿勢が「学校ブランド」の構築につながるのではないのでしょうか。これまでは、とにかく新しい取り組みや他校と違う活動を行うことを「特色ある学校づくり」と言い過ぎていたと思います。そうではなく、地に足の着いた教育活動を通じて「学校ブランド」を構築することが、公立小・中学校の本来の役割だと思っています。

新藤 向山先生のおっしゃる「学校ブランド」とは、単に、目に見えるテストの点数の高さを保つことなどだけではありませんよね。そ

れは、本来の意味で社会や保護者の期待に込められているとはいえないからです。義務教育段階の学校としての役割を、各校で真摯に追究する姿勢が、「学校ブランド」につながるのではないのでしょうか。

少子化や子どもの変化の中で 新しい価値を生み出す学力を育む

——教育活動の中身という視点から考えると、今後、どのようなものが重要になるのでしょうか。

向山 これまでも、これからも学校に期待されることの一つに「将来への備えをする」ことがあります。この点から考えると、現在、小・中学校には約1000万人が在籍しています。少子化によって10年後には約900万人になると推計されています。単純に考えても、現在よりも1割増の力を付けなければ、日本は生産性を維持できません。そのため、どのような力を育むのかは極めて重要です。新しい価値を生み出せる子どもを育むことは、不可欠だと思っています。

新藤 子どもの状況を見ると、考えることを面倒だと感じる子どもが増えるのではないかと危惧しています。自分で考えるのを早々に止めてしまい、誰かに正解を求めようとするのです。そのような子どもたちに必要なのは、論理的にとことん考え抜く力ではないでしょ

うか。

向山 社会の情報化が進む中で身に付けなければならぬ学力についても、もっと検討する必要があります。子どもはいろいろな知識を既に得ていて、教師との情報格差が一気に縮まりました。これまでの学力観や、授業時数(図2)とは異なる視点による指導が求められると思います。

新藤 多くの情報に囲まれている影響なのか、最近、世の中や自分の将来を見限ってしまふ子どもがいると感じます。「頑張っても良いことはない」などと、自分の可能性を諦めてしまうのです。残念なことに、「自分の子どもはこの程度」と見切りを付けてしまふ保護者もいます。考えることや将来の可能性に消極的な子どもに付けるべき学力を、もっと真剣に検討しなければなりません。

求められる学力育成のための 授業づくりの重要性

——求められる学力が従来と変わることについて、重要な視点はありますか。

向山 授業づくりです。前提として、日本の先生方の授業力は世界に誇れるレベルだと思います。とりわけ、一斉授業での指導力は世界でトップではないでしょうか。この数十年、私は日本全国、いろいろな先生方の授業を4000回近く見てきましたが、昔に比べて、

今の先生方の授業力が落ちていとは思いません。しかし、約40年ぶりに授業内容や時数が増えたわけですから、ベテランの先生方も、授業づくりにおいて大きな壁にぶつかるとも、授業づくりと心配しています。

また、いろいろな教材が手に入りやすくなった反面、教師自身のアイデアやひらめきによって教材を分析・開発する力が弱まったのではないかと感じることもあります。こうした状況だからこそ、授業づくりが極めて重要になります。

新藤 中学校は、どうしても高校入試を意識せざるを得ないところがあります。高校入試で問われる知識の伝達を主眼とした、教師主導の指導から抜け出せない教師もいます。高校入試を意識しつつ、今後の社会で求められる学力を育む授業をいかにつくっていくかが問われています。

向山 加えて、今後、ベテランの先生が大量に定年退職し、新採の先生が急速に増えていく点も(図3)、授業づくりに大きな影響があります。

新藤 そうですね。小・中学校共に、長年にわたり新採の先生が入ってこなかったため、校内で若手教師を育てるシステムが機能しにくくなっています。東京都では、08年度に人材育成の基本方針とOJTのガイドラインが出されました。まさに危機感の表れです。

向山 おっしゃる通り、かつては先輩が後輩

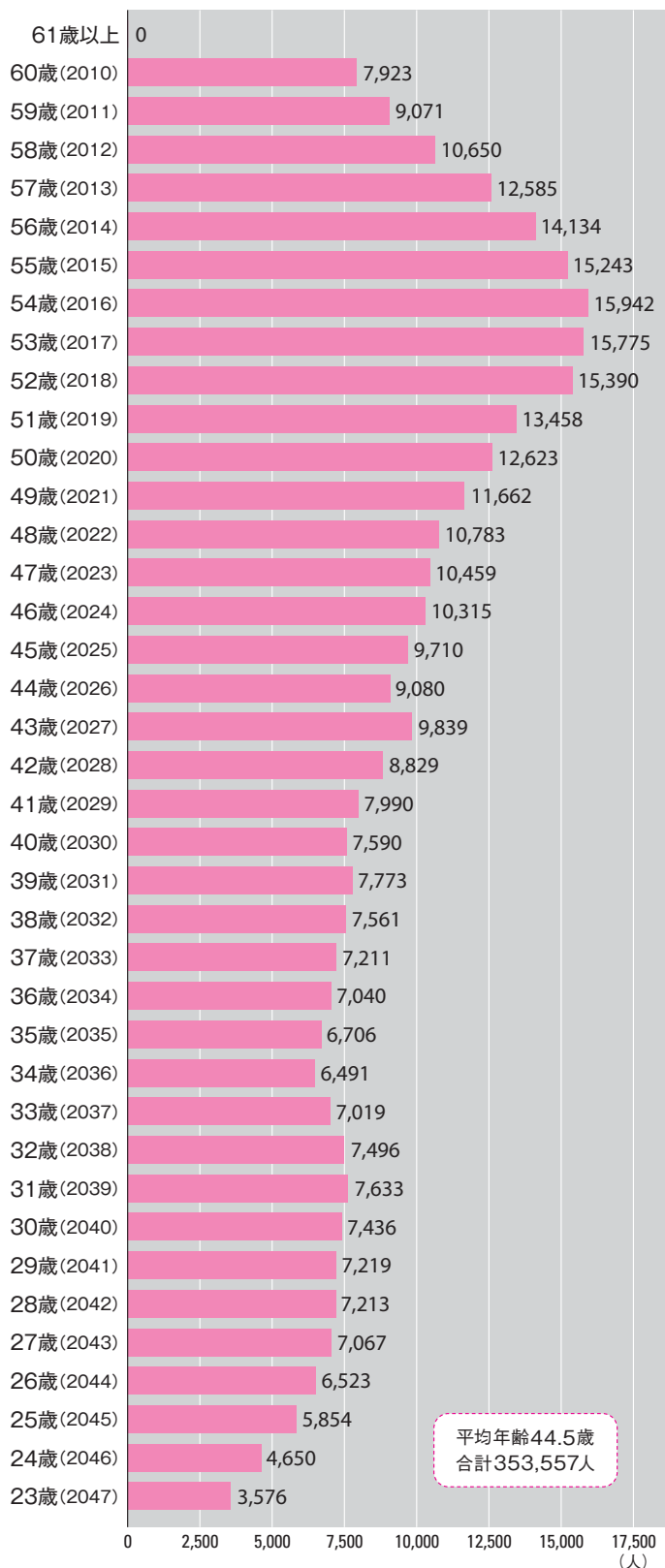
図2 学習指導要領と授業時数(小学校)の変遷

改訂年	6年間の総授業時数	特徴
昭和33~35(1958~60)年	5,821	教育課程の国家基準としての性格の明確化(道徳の時間の新設、基礎学力の充実、科学技術教育の向上等)
昭和43~45(1968~70)年	5,821	教育内容の一層の向上=教育内容の現代化(時代の進展に対応した教育内容の導入)
昭和52~53(1977~78)年	5,785	ゆとりある充実した学校生活の実現=学習負担の適正化(各教科等の目標・内容を中核的事項にしぼる)
平成元(1989)年	5,785	社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成(生活科の新設、道徳教育の充実)
平成10~11(1998~99)年	5,367	基礎・基本を確実に身に付けさせ、自ら学び自ら考える力などの[生きる力]の育成(教育内容の厳選、「総合的な学習の時間」の新設)
平成20(2008)年	5,645	[生きる力]という理念の共有と実現(基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成、確かな学力を確立するために必要な時間の確保)

*中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」2008年1月17日 215~218頁 を参照し、編集部で作成

現在と未来をつなぐ小学校教育

図3 公立小学校 年齢別教員数



注) ()内は該当年齢の教師が定年退職をする年度
*文部科学省資料(2011.3.31)を基に編集部で作成

を育て上げる関係が校内にありました。周りの先生も、新採を即戦力というよりは時間をかけて育てる気持ちが強かったと思います。しかし、一校に複数の初任者が入ってくる状況では、難しくなっています。

新藤 小規模校が多くなっていることも、若手の育成を難しくしている要因の一つでしょう。成長していくのを待つ余裕がないため、「早く一人前になってほしい」と即戦力を求めてしまいがちだと思います。ただし、中学校では基本的に新採の先生は担任を持ちませんし、何事も学年団で進める傾向が強いため、

小学校に比べて、多少は負担が軽いかもかもしれません。

向山 若い先生方の増加と共に、彼らの価値観が変化していることも、育成方法に影響がありそうです。教師は、帰宅後や休日も保護者や地域の方たちから電話がかかってきますし、地域行事への参加も期待されます。「24時間教師である」という覚悟がなければ、なかなか続けられる仕事ではありません。若手教師の離職率の高さの背景には、教師という仕事への思いが異なっていることもあるのではないかと思います。

新藤 最近の若手の先生の変化として、他の先生の授業や学級運営のやり方を見て、良い面を盗むという発想が弱まっている気がします。先輩の授業を見るように声を掛けるだけではなかなか動きませんし、実際に他の先生の指導を見たとしても「私には出来ません」と早々に諦めてしまう。出来ないのは当たり前で、10年後に出来るようになるために今すべきことを考えてほしいのですが、なかなかうまくいきません。個々の先生の自主性だけに任せるのは難しいかもしれません。

向山 このように考えると、学校全体として



授業づくりを考えることが不可欠です。新しい学力を子どもに付けることが求められる一方で、新しい価値観を持った若手の先生が増えている状況下では、授業研究の充実がますます求められていると思います。

限られた資源の中で 目的を達するための組織づくりを

——授業づくり以外に、重要な視点はありますか。

新藤 学校の組織づくりだと思います。多忙な中で、良い授業をつくり、子どもに必要な学力を付けていくためには、校長の役割も含めた学校組織のあり方が問われます。

向山 学校組織を考える上では「不易」と「流行」を見定めることが大切になるでしょう。守り通すべきことは、たとえ学校外から「古臭い」と言われても維持していくべきです。一方で、社会や求められることの変化に応じて、変えるべきことは変える決断も必要です。各校で何を守り、何を変えるべきかを問直す必要があるのではないのでしょうか。

新藤 校長には、そのビジョンを示すことが求められますね。実際、校長がビジョンを持たずリーダーシップを発揮していない中学校は、往々にして荒れています。もちろん、校長は全能ではありませんから、周りの先生方の力を学校経営にいかに取り込んでいくかが重要です。そのためには、先生方が校長の「イエスマン」にならず、率直な反対意見を出せる雰囲気を校内につくすることも必要ではないでしょうか。

向山 校長が力だねじ伏せても、なかなかうまくいきません。校長の仕事は、オーケスト

ラの指揮者のように、個性的な楽器を上手に束ねていく役割ではないかと思います。

新藤 私もそう思います。ただ、教師が十数人という小規模校では、一人ひとりの教師がたくさんの役割を担っていることも見逃せません。一人の不協和音の影響が大きく、なかなかまとまらないケースもあるようです。今一度、教師の役割分担を見直す必要もあるかもしれません。

向山 学校経営において、確かに小規模校化の問題は大きいです。「ヒト・モノ・カネ」のいずれも潤沢であれば、学校経営は誰でも出来ます。限られた資源の中で、いかに学校組織を活性化できるかが課題でしょう。

子どもに不利益が出ないような 小・中学校の接続を進める

向山 これからの義務教育を考える時、やはり小中接続の視点も欠かせないでしょう。小・中学校がそれぞれの学校段階で力を尽くしていることを、確実に子どもの成長の糧とするためです。以前、中学校の理科の授業を参観した時、先生が実験前に顕微鏡の操作方法を30分かけて説明していました。これは小学校で学んだ事項ですから、生徒からは早く実験に取りかかりたい様子がうかがえます。この先生は、小学校のカリキュラムを知らずに授業を進めていたのでしょう。こうし

現在と未来をつなぐ小学校教育

た非効率的な指導が起こらないような接続を図っていく必要があります。

また、「中1ギャップ」は、子どもが中学校の教科担任制についていけないことも大きな要因です。そうした制度的な面からも接続のあり方を考える必要があります。

新藤 中学校側から見た課題は、中学校の教師に「中1ギャップ」があることです。一般的に中学校では、教師は3年生を卒業させた翌年に1年生の担任となります。すると、1年生がとても幼く見え、「何も出来ないのではないか」と能力を低く評価してしまうのです。例えば、小学生でも給食の準備は十分に出来ますが、中学校に入ると出来なくなってしまうケースがよく見られます。小6生と中1生の教師が交流し、新入生の力を正しく理解できるかが課題です。

逆に、自分の生き方に関して考える素地をつくるキャリア教育は、その後の広い意味での進路指導につながります。小学校の間にもう少ししていただくと良いのではと思うこともあります。

向山 「教育の検証には20年かかる」とよく言われるように、小中接続の取り組みの成果や課題はまだ明らかではありません。今後は、問題行動の発現率など、短期間で測定可能なデータを参考にしつつ、自校に合った形を模索すべきではないでしょうか。

——本日はありがとうございました。

図4 これからの小学校教育において重要な五つの視点

「基調提案」で出された五つの視点をまとめた。この五つについて、具体的に何が求められるのか。次ページからの「理論編」「実践編」で考えていく

